



千葉遥加 Chiba Haruka 緑のふるさと協力隊員

千葉県柏市出身。千葉市立松戸高校卒業後、緑のふるさと協力隊隊員第16期生として川根本町に派遣され、1年間の活動に従事する。本町3代目の隊員。活動開始平成21年4月13日、活動終了平成22年3月10日。

生の女の子が舞う「ヒーヤイ」の笛の役。最初はうまく音が出せず、女の子たちに迷惑ばかりかけていましたが、熱心に練習したおかげで、かなり上達することができました。

当日は、袴を着て舞台上に上がりました。わたしは初体験の袴に大はしやぎ。祭りは、国指定重要無形民俗文化財だけあって、たくさんの方が来場し、すごくにぎやかに感じました。

本番で初めて鹿ん舞を見ました。迫力があって、とつてもかっこよかったです。

音にたわむれる仕事

9月から10月にかけて、千頭の奥

校「お宝発見ツアー」では、見ご

ろを迎えた紅葉の中、井川線に乗って接叡峡の八橋小道ラブロマンスロードを散策したり、久保尾にある天空の茶産地「ヒロヲ」地区に行ったりしました。ヒロヲでは、山の中に広がる広大なおひかりの茶園を見ながら話を聞き、生産者の皆さんの、お茶にかける情熱を感じました。

12月になると途端に寒さが厳しくなってきました。上旬までは「今年はぬくといなー」なんてみんな言っていたのに、中旬を過ぎたら急に寒くなり始めました。

冬支度のためにホットカーペットを貸していただいたり、着ないからあげるよ」と冬用の服をくれ

大井音戯の郷で、お手伝いをしていました。出口付近の工房で、教えてもらいながら工作の下準備をしたり、売り物用の作品を作ったりしました。

ちょうどハロウィンの時期と重なっていたため、館内をハロウィン風に飾り付け。画用紙や折り紙の手作りカボチャや魔女、お化け、黒猫などを、窓ガラスに貼ったり、机にぶら下げたり、カウンスターの上に置いたりすると、館内はまんまハロウィン仕様。見ているだけでうきうきしました。

音戯の郷では、さまざまな人と出会う機会がありました。出会った人がまた新しく別の人を紹介し

たりと、服以上に人の温かさを感じました。

お正月は、にぎやかに過ごすことができました。おいしいもの、たくさん食べて、箱根駅伝を見て、こたつに入ってゲームをやつて、幸せを感じました。

元旦に徳山の新年会に参加したところ、おじいちゃんたちが可愛がってくれました。みんな元気に樽酒を飲んでいましたが、誰かが酔って帰り道で倒れやしないかと密かに心配していました。

最後という言葉が寂しい

2月はわたしにとって最後となるイベントが多く、寂しい気持ちが増えました。今この最終話を書

てくれたり「あそこにはあんな人がいるよ」「こんな人がいるよ」と教えてくれたりと、人の輪がどんどん広がっていききました。

神楽を堪能した秋から冬

10月からは町内各地の神楽に参加しました。徳山神楽に始まり、国文祭神楽フェスティバル、11月

には夜つびとい神楽、翌1月には梅津神楽にと、本当にたくさん参加させてもらいました。わたしはやっぱり伝統芸能が好きです。11月は山々が紅く染まり、川根本町が美しく色づきます。県内外から観光バスがひっきりなしに訪れ、多くの人でにぎわいます。この時期に開催された千年の学

この町で、人の温かさを知りました
一生かかっても返せないくらい
たくさんのお恩を受けました

いているのも2月下旬。これを書きながらも、以前書いた記録を読み返したり、消したり直したり……。丸

一日がかりの作業です。いつか皆さんが、「そういえば広報にこんなコーナーもあったな」と、少しでも思い出してくれたり、それだけでも書いたかいたが良かったというものです。

皆さんがこの風ノハルカ最終話を開いているころ、わたしはもう、緑のふるさと協力隊の隊員ではありません。この一年ずっと、協力隊って何なんだろう。何のためにわたしはここに来たんだろう……。そんな疑問との戦いでした。そして思い悩んだとき、思い出す言葉がありました。

「町の皆さんは、この町には何もないと嘆いているけれど、そんなことはない。あなたのような若い人が、自分から喜んで来てくれるほど魅力にあふれているんだ。そのことを町の皆さんに、ぜひ知って欲しい」。見ず知らずの町で、以前の生活とのギャップに悩み苦しんだこともありました。でも苦しさよりも、もつとたくさんのお恩をもらいました。この町に来て、人の温かさを知りました。皆さんから、一生かかっても返せないくらいたくさんのお恩を受けました。わたしは決して、それを忘れることはありません。



「風ノハルカ」は終わらない

遥加さんは2月1日、川根高校に招待され、全校生徒に向け講演した。彼女は静かに、そして真摯に、この町での経験や協力隊について思うことなどを切々と語った。

「わたしは決してよい高校生活を送っていたわけではありません。自宅ではパソコンに没頭し、昼夜が逆転した生活を送っていました。卒業を迎えたころ『こんな高校生活でよかったのか』と思ひ悩みました。だからこそ違う環境に身を置いてみたかったんです。わたしはこの町に来て、生活が一変しました。朝起きて、昼間活動し、夜は寝る。そんな規則正しい生活をする中で、ここの自然や人の温かさに魅せられていきました。地域の人たちは実の親のようにやさしくて、一気に親戚が増えたように感じました。あこがれの伝統芸能にも参加させてもらい、受け継ぐ誇りのようなものを感じることができました。この1年間、色々とお悩むこともありましたが、今なら『わたしの選択は間違っていなかった』と、胸を張って言うことができます。

協力隊活動の終了が近づき始めた2月、遥加さんは、川根本町にとどまることを決めた。その胸の内を聞いた。

「わたしが協力隊としてこの町に来たのも何かの縁。1年間本町で暮らしてみて、ずっと、ここで何をすべきなのか、何ができるのだろうか、と、自問自答を繰り返してきました。精一杯やってきたけれど、まだその答えは見つからない気がします。このままじゃ帰れない。もう少しここに身を置いて、まだ見つからない『何か』を探してみたいんです。

暖かな風が吹き始めた。木々の花もほころび始めた。春の足音が近づき始めた川根本町で、遥加さんは新たな「風ノハルカ」を書き始めた。今度は自分自身のために。この町の一員として。

最終話 ラブ・レター

LoveLetter